

# 衝動性の高い小6男児とのプレイセラピー

—キャッチボールに着目して—

宮本 純子

Play therapy with a 6th grade boy who is highly impulsive

—Focusing on catch ball—

Junko Miyamoto

## Abstract

This study reports a case of a 6th grade boy with high impulsivity whose impulsivity weakened through play therapy centered on playing catch, and his interpersonal relationships in daily life also changed. As the relationship between therapist and mother deepens, the boy begins to express himself and behave more freely. Through playing catch, he experienced catching and being caught a ball, which led him to change into playing catch with words. Furthermore, as you become better at catch-ball, you will experience a sense of accomplishment and gain confidence. Gradually, he is able to play with his friends in everyday life, and he comes up with various ways to control his impulsiveness when he makes a mistake. The relationship between the therapist and the mother supported the boy, and through playing catch he gained a sense of accomplishment and self-confidence, which led to him accepting his impulsive self and making efforts to control it.

**Keywords:** play therapy, highly impulsive, catch ball

## I. はじめに

文科省は2002年から10年ごとに「通常学級に在籍するという特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査」を行った。その結果、通常学級に在籍する生徒のうち、担任から見て「知的発達に遅れはないものの、学習面や行動面で著しい困難を持っている」と回答した割合が6.3%（2002年）、6.5%（2012年）、8.8%（2022年）と増加している。また、「児童生徒の受けている支援の状況」の調査（※平成14年では調査せず）

では、「校内委員会において、現在、特別な教育的支援が必要と判断されているか」に対する回答において、「必要と判断されている」が18.4%（2012年）、28.7%（2022年）と10%以上も増えている。通常学級に在籍する特別な支援を必要とする児童生徒数が増えている一方で、支援も増大していることがわかる。特別な支援を必要とする児童生徒が増えたということも考えられるが、むしろ今まで見落としていた特別な支援を必要とする児童生徒に目が行き届くようになったということも考えられる。良い成績をとっている子どもたちでも、日々「困り感」を抱えている子どもや、能力が高いにもかかわらず、書きの問題を抱えているために学習の遅れが目立ってきている子どもがいる。そういった子どもたちは、これまでの特殊教育の枠組みの中や、また普通教育の枠組みの中でなかなか支援を受けられなかった子どもたちである。しかし、近年、このような特別な教育的支援を必要とする児童・生徒は、特別支援教育の枠組みの中で、治療教育されるようになってきていると大井(2007)は述べている。

その一方で、これらの特別な教育的支援を必要とする子どもの居場所が、現在の特別支援教育では、ないのではないかという見解も述べられている(片桐, 2008)。先の調査でも「校内委員会において、現在、特別な教育的支援が必要と判断されているか」に対する回答で「必要と判断されていない」が70.6%（2022年）という結果である。7割近い回答で特別な支援は必要ないと判断され、通常学級の中で知的な遅れは見えないが、周囲の児童生徒と同じように取り組むことが難しく困難を抱えざるを得ない児童生徒が支援のないままに未だ多く存在していることが推察される。

そのような困難を抱えた子どもたちは、その特徴を気づかれないまま養育されることが多く、養育過程のさまざま体験を通じて形成された二次的障がいと併存するに至って、初めて医療機関の受信が必要になるという場合が少なくないという(齊藤ら, 2007)。知的な遅れを伴わないことから障がいがあることに気づかれにくく、周囲からの叱責や誤解が生じやすいということも考えられる。特に二次的に生じる自信の喪失、自己評価などの問題が将来の社会適応問題となることが強調されており、その影響は大きい可能性がある。個人個人に合った適切な治療教育を行い、失われた自信を取り戻させることが必要である(大井, 2007)。最終的に問題になってくるのは本来の症状ではなく精神・情緒面の問題であり、そのような子どもたちが抱える心理的問題へのアプローチは大変重要なものだと考えられる。

特別な支援を必要とする児童生徒が抱えている困り感や心理的な問題は様々なものがある中で、中村ら(2007)は、自己抑制能力は集団の中で適応していく上で非常に重要な要因であると述べている。多動性・衝動性の高い児童は、自己抑制の難しさを持つと指摘する。自己抑制能力の中には、内省や情緒および体験を内在化することなど自己の体験を振り返る能力が含まれている。このような能力により、人間は外部の環境の変化だけではなく、自分の考えを基準に行動できるようになる。多動性・衝動性の高い児童は、他者とのかかわりにおける失敗体験を日常的に体験しやすいことや、衝動的な行動が目立ってしまい「わがま

ま」など否定的なとらえ方をされやすいことから、自尊心の低下なども生じやすい。対人場面においてより他者に受け入れやすい方法で他者にかかわれることができるよう援助することや、彼らが他者に認められる体験を増やしていく必要があると述べている。さらに被受容感や情動体験感を得られることや、安心感や信頼感を基盤にした関係性の活動の中で、達成感を持つことを援助していくことも重要であると述べている（中村, 2008）。

本稿では、普段なかなか自分をだせずに衝動的になりやすい男児とのプレイセラピーについて報告する。同一セラピストが母親面接も行っていたため、セラピストと母親の関係性が深まるにつれてクライアントが自分を語り出し、キャッチボールを中心とした遊びの中で達成感を味わい、自分の衝動性を抑制する方法を思いついていく。その面接過程を振り返り、衝動性抑制につながった様々な側面について考察するとともにキャッチボールの体験の意義を検討することを目的とする。

## II. 事例の概要

**クライアント（以下、C1）：** 小6 男児

**家族構成：** 父, 母, 兄, C1, 弟

**他機関での診断：** なし

**主訴：** 勝負ごとにこだわり、負けると衝動的になる。母親が「自分の気持ちをため込まないで話せるようになってほしい」と語られた。

**生育歴：** 妊娠・週産期は特に異常なし。言語発達はそれほど遅れていない。運動発達は特に問題なく、竹馬や自転車などは人一倍習得が遅いが、努力でカバーしている。対人関係性の発達においては、絵本をじっと眺め一人で黙って遊んでいることが多かった。幼稚園の頃は、気に入らないことがあると先生のお尻を殴ったり（抱くと落ち着く）、集団行動から外れることは無いがなぜか仲の良い友達が出来ず一人でいることが多かった。

**面接構造：** 隔週 1 回 50 分のプレイ・セラピー（X+1 年より月 1 回に変更）。各セッション終了後、15 分程度、母親にプレイでの本人の様子をフィードバックし、さらに母親から本人の日頃の様子を聞く時間を設けている。母親はセッション中の内容をビデオで見ることができる環境である。

**筆者が担当するまでの経緯：** X-1 年 6 月から X 年 3 月まで、前任者がプレイセラピーを担当する。勝負事で負けると衝動的になりやすく、学校でも仲間と遊べない。少しずつプレイセラピーの中で語り始めていたが、自分の気持ちの処理に難しさがああり、衝動性は課題として残っていた。

**倫理的配慮：** 本論文の作成・発表にあたっては、終結時に母、C1 とともに同意を得た。経過の記載についてはプライバシーの保護に十分に配慮し、論旨に影響のない範囲で一部改変を行った。

### Ⅲ. 面接の経過

以下、筆者をTh、対象児をC1、母親をMo、父親をFaと表記した。また、特に記載のない場合、〈〉をTh、「」をC1及び母親、父親、『』をその他の人物の発言とした。

#### 第1期：衝動性が出てくる時期（#1～#6：X年7月～X年11月）

#1では、C1は集団プレイルームに入るなり、「久しぶりだ」と言ってトランボリンにダートと走って行き、楽しそうに飛び跳ねる。卓球をするとC1は球を引っかけたり、台から出してしまふ。その度にラバーをはがそうとしたり、サーブをいきなり強く打ち、Thの静止はきかない。キャッチボールでは、Thがゆるいボールを投げてもC1はなかなかキャッチできない。フリスビーはブラインドにあたりたり、壁に当たりたり、とにかく加減を知らないかのように投げてくる。

#2でも、C1はキャッチボールをしたがり、たまにボールを受け損ねると、すぐに拾って、見境なく投げるため暴騰し、ブラインドや壁に激しくあたる。Thの制止は聞こえていないかのようなようだった。

#3から、受け損ねると必ず相手を見ずに返してくるC1に、その都度Thが〈ここ見て！ここに投げて〉と声をかけると、Thが示す場所を見て投げるようになった。

#4で、ドッジボールに使うような大きなボールでキャッチボールをしていて受け損なうと、ボールを思いきり蹴る。「蹴るとサッパリするんだ。とれないとイラッと来てボールを蹴りたくなるんだ」と言って、蹴ったあとは普通通りにボールを投げてくる。〈失敗したときこそ、深呼吸して、どこに投げたらいいかゆっくり見て投げよう〉と伝える。その後、バッチングをして空振りするとイライラしている様子で、何かを蹴りに行ったり、壁を素手でたたいたり、怒りを表してきた。〈そんなにしたら自分の手が痛いやろ〉「うん、青くなるときもあるんだ」と答える。気持ちを落ち着かせるために〈肩を上げたり下げたりしよう。深呼吸〉と伝えると素直に一緒にやる。〈失敗するとイライラするんだね〉「ウン。何か蹴ったり、ものにあたるとスッカリする」〈失敗してイライラするのは仕方ないけど、何か気持ちがスッカリするいい方法探そうね〉。

#5でも、ミスをする、やはり強く投げてくる。〈バカ野郎！って言おうか。どうしたらいいかなって考えてきたけど、いい方法ないし、二人でボール蹴ろうか・・・〉と言うとC1が「深呼吸。深呼吸」とThに向かって「先生、ここ見て」とグローブを見るように指示する。その後、ミスが続いてC1が横にあったホワイトボードにあたりたところ、ホワイトボードに雪だるまの絵が描かれていた。C1は雪だるまの顔に目を描き始めた。怒っている顔だった。Thも横に行って赤いマジックで雪だるまを描いた。たれ目で失敗して困っている雪だるまを描いて〈『ごめんね。許してね。グローブがうまく使えないの』と言葉を添えた〉。C1が「じゃ、全部消して描こう。最初は無表情」と言って、雪だるまの顔を新しく描いた後、素手でキャッチボールを始める。ミスすると少しいらだつ。〈絵を描こう〉。C1は雪だるまに眼鏡を描いて黒く塗りつぶす。「サングラスをかけてるんだ」。強面の雪

だるまだった。

#6 では、野球のゲームをする。1 回戦は C1 が 5 点入れ、Th はなかなか打てずに三振アウト。C1 がボールを大きいのに変えようと提案。バレーボールに変えるが、なかなか難しく Th は打てない。結局、最後の回で「最後に打つと 5 点」と言って、C1 が点差を縮めるようなルールを作り、Th の負けにならないようにして同点で終了。

#### Mo. との話：

#1 では、Mo が Th に 3 つのことを質問した。結婚はしているのか。子どもはいるのか。その子は何歳か。#2、#3 では、夏休みはほとんど友達と遊ぶことがなかったことと、親戚の家に行っても従兄弟と遊べないと話された。また、「集団になじみにくいところがある。やられてもやり返すことができない」と Mo がはがゆそうだった。#4 では、「ここからビデオを通して見てると、発散してるなあと思って見てました。好きにやってる。ここまで、自分を出したのは初めてだと思う。ゲームで負けたりすると、半端じゃない。勝つまでやろうとするし、大声出したりして暴れる。お父さんがいると叱られるから絶対やらない」（いつ頃から、できないとあたるようになりましたか）「小さい赤ちゃんの時から。うまいかないと、自分で頭の後ろを壁とかにガンガンぶつけるんです」。#5 では、「キャッチボールは上手になっている。打つのもうまくなった・・・」と C1 を認める。#6 では、「学校では、落ち着いている。ただ、中学をどうしようか迷ってる。この間、発達教育センターに行って、WISC をとって面接をしたところ、特学という判定が出た」と話される。

#### 第 2 期：自分を語り出し衝動性が弱まる時期（#7～#11：X 年 12 月～X+1 年 3 月）

#7 は、いつもと様子が違い、軽くボールを投げ始めると「中学校、どうするか困るとる」と口火をきる。〈困るとるって？〉と Th が尋ねると「兄ちゃんと同じ特学のある学校に行くか。このまま普通の中学に行くか・・・」と C1 の迷いを語る。Th が〈特学のほうがいいと？〉と尋ねると「うん。特学のほうがちゃんと宿題出してもらって、兄ちゃんがそれをやってる。勉強わかんないから、宿題を出してもらわないと何をしたらいいかわかんない。それに、このまま進むと嫌な子と一緒にいる。だから別の学校のほうがいい」と答える。〈嫌な子って？〉と Th が尋ねると「学校で給食の時に俺が配ったスプーンを使わない女子がいる」。一人の女子の態度に憤っている。時々ボールを受け損なうが、全然気にしない。いつもだったら、はずすといきなり強いボールを見境もなく投げってくるのに、いっこうに気に留めてない様子。〈他には嫌なことする子はいないの？〉「下級生がする。特に 5 年生の男子でバカにする子がいる。俺がボールを遠くまで飛ばせないとバカにする。その子は、足も速いし、ボールも遠くまで飛ばせる。それに、1 年や 2 年も俺の名前を呼び捨てにする」。

#9 は、準備運動をしながら、あれこれ話す。「兄ちゃんは、誰とでもすぐ話せる。でも、俺はできない。みんなとすぐ話せない」。Th は黙って聴いていたが、〈でも、そのすぐには話せない、ちょっと恥ずかしがり屋のところが C1 君のいいところよね〉と言うと Th の顔を見る。一瞬、時間が止まったよう。すぐにボールを取り出して、ビデオカメラの方をちょ

つと見て見える位置に立つ。

#11 で、春休みの過ごし方を尋ねると、みんなで集まって遊んでることを楽しそうに話す。〈どこか入りたい部活ある？〉と中学の話題に向けると「野球部に入りたいけど・・・ぜんぜんできんし・・・ルールも知らないし・・・へたやし・・・それに、やりたいけど意気地なしやし・・・体験入学で見たことある・・・」とゆったり投げながら話す。C1 は受け取るのを失敗しても、そんなに気になっていない様子。「廃部寸前だったら入れるけど・・・入っても玉拾いばかり・・・意気地なしやろ・・・遊びの野球も入れてって言えなくて、兄ちゃんに言ってもらった・・・意気地なしやろ・・・3年か4年のときだった・・・」〈そうか・・・兄ちゃんが言ってくれたんだ〉。C1 が本当は野球をやりたいのに踏み込めない気持ち痛みほど伝わってきた。

#### Mo. との話：

#7 は、「来る前から、今日は僕の心の叫びを聞いてもらおうかなと言っていたんです」と話される。#8 は、最近弟さんの不登校で困っていることを話された。その後、「この間、学校で嫌な子に C1 が何かされて、頭にきてボールを投げ返したら、強いボールが相手の顔面にぶつかったって言ってましたから、やり返せるようになってるみたいです」。#11 は、Mo がプレイ中のビデオを見て、「失敗しても話してるときはやっぱり気にならないようですね」と話される。「ここは、何でも話せる場でお話していいんだよも言ってます」と Mo が理解を示す。「3 学期の後半になって、友達とも遊べるようになり、春休みも約束して遊んでいる。友達と別れて中学に行くのは寂しいんじゃないかとも思うけど、本人は勉強がついていけないのがイヤみたいで、特学のほうが安心だと思っている」。

#### 第 3 期： やや衝動性もおさまりのびのびする時期 (#12～#18：X+1 年 4 月～X+1 年 10 月)

#12 では、中学の制服を着てきた。今までになく、にこやかでのびのびした表情をしていた。顔を見ただけで、中学校の生活が楽しいのではないかと思われた。キャッチボールをしながら、「メチャ、困る。勉強わからん。俺、特別支援学級のみんなどと同じ高校に行けんと。俺みたいなレベルの人は行けんと・・・だから、今のうちに交流クラスで勉強して慣れていた方がいいって・・・」〈でも、普通高校に入れるってことはすごい・・・〉と Th は C1 が普通のクラスで勉強できることを喜んでいる。〈数学わからないとこあったら、そのままにしないで先生に聞くようにしたらいいね・・・〉と Th が言うと、C1 は受け損ねたボールをいきなり強く投げた。壁にぶつかり、C1 の手元に帰ったボールをまたさらに壁に投げつけた。「チキショウメ！」〈急に投げたくなつたと？〉「投げたくなつた・・・野球大変やった」と言って、フリスビーを取り出す。

#13 では、三輪車を見つけて乗り始める。Th の周りを大きく円を描くようにゆっくり回り始める。交流クラスの授業について Th が尋ねると、「難しすぎる。数学は 40 問とか問題でる。難しすぎてできん。特別支援学級に戻りたくても言えん」と答える。

#14 で気になっていた数学のことを Th が尋ねると「数学のテストで 46 点とった。50 点

いかなかったけど、目標は30点だったので褒められた。英語は41点だった。数学で最後の難しい問題ができた。先生の言ったとおりにやったらできた」と言って、最後の難しい問題をThに説明する。勢いのいいボールを気持ち良く投げてる。

#15は、今までと違って学校のことも話さなければ、家のことも話さない。こちらから質問しないと話はずまない。無言のまま黙々と投げあう。Moの留守中に女子を無断で家に入れて叱られるということがあったと母親面接のとき知る、。

#17では、Moの他にFaも来られた。C1は始めからほとんど話さず、いつもの生き生きとした様子や明るさがまったくないので、理解されにくい雰囲気をかもしだした。いつもやっていたキャッチボールもせず、バスケットボールと卓球を言葉少なく、黙々とやる。

#18は、C1が玄関に入ってくるなり、「今日は体育があつて、遅れると全体責任になるから、11時20分には出なくちゃいけない。これからずっとそう」と始めからしゃべりどうしで、学校生活が楽しそうな印象。Faに顔が似ていることを話す笑顔になり嬉しそうだった。

#### **Mo. との話 :**

#12では、中学で楽しくしている様子をMoが話された。しかし、交流クラスに入れた喜びと嫌な気持ちの二つがあるとも言われた。#13で数学に対するC1の不安をMoに話したところ、#14で、Moが学校の先生に話したらしく、個人的に教えてもらう時間ができてわからないところが解消できたらしい。毎回、数学の授業があるときは交流クラスの数学の先生が迎えに来てくれているとのこと。#15では、Moの留守中に兄とC1が女子を家に入れたことで、ウソをついたことがばれ、先生や両親に怒られたことを話された。#17は、Faの仕事が休みで一緒にこられた。仲の良い夫婦という印象。穏やかで優しいような眼をしたC1にそっくりなFaだった。Faは、C1が今まで兄弟の真ん中でしかも兄が障がいを持っていたので、どうしてもC1に目がいきにくい環境だったことを話された。それで、C1が自分の気持ちを話すということがあまりできなかったこと、もう少し話せるようになるといいということを穏やかに話された。#18では、学校の帰りに兄にかばんを持たされて家に着いてから抗議したエピソードをされた。Moは「その時に断りなさい」と話した様子。

#### **第4期：衝動性を態度で表し始めた時期（#19～#26：X+1年11月～X+2年9月）**

#19は、初めて土曜日にプレイセラピーをした。C1が学校を休みたくないとの希望で平日から変更。C1はバスケットボールを取り出し、チェストパスを始める。足を交互に出してパスをするのが難しく様子がおかしくなる。足を左右でトントンと床をこするようにしてたたく。わからないときは、言葉で伝えてほしいとThが言うと、黙ってうなずく。チェストパスの足も上手にできるようになっても足をトントンするだけで、何も言わない。たまにニヤッと笑う。

#21では、3年生を送る会でバスケットボールをしたことをキャッチボールをしながら楽しそうに話す。「特別支援学級のクラスで1年から3年の混合チームを作った。俺が6点を

入れて勝った」<すごいや>。終わり頃に「これ、宿題だけど何をしたらいいかわからない」と言って春休みの宿題と通知表を出す。宿題は二人で話しているうちに決まり、通知表はバスケットの活躍が書かれていた。

#22 では、自分のグローブを持ってきた。受け損ねると、急いで取りに行き、振り返ったと思うと、Th のほうを見て、ゆっくり投げ返した。<すごいね。こっちを見てからゆっくりコントロールして投げてるね>。バスケットのシュートを打ち始めると、入らないときにゴール下の周りを歩きだす。<イライラすると？>と尋ねても無言。はずすたびにゴール下まで無言で歩く。<どうしたと？話してみても>。無言。<何かいい方法ない？>。無言。<深呼吸しようか>に頷く。二人で深呼吸。

#23 では、家で弟や Fa とキャッチボールをしていると誇らしげに話す。

#24 では、C1 の希望で卓球をする。「担任の先生が普通のクラスに行けるって。それで、7月までに考えておくようにって」<A君はどうしたいの？>「どっちでもいい。でも、お母さんが今はみんな親切だけど、クラスメイトになると前みたくいじめられるんじゃないかって・・・それに勉強も1年からみんなと一緒にやってないからついていけるかどうか心配」と話し、卓球には集中できず、心ここにあらずという印象。

#25 では、キャッチボールを始めると「今は勉強も追いつかないし、交流クラスには行けないって、先生に聞かれたらはっきり言う」と気持ちが決まってすっきりしている様子。バスケットボールで何度もシュートを打つ。何本かははずすと手をポンと叩く。「イライラするとき手を叩くと治る」<いつ発見したと？>「何となく」<すごいや>。シュートが成功した時はパチパチと叩き、失敗したときはパチッと叩いている。

#26 では、キャッチボールを始めると、いつもと様子が違い、無口で質問に短く答えるだけ。ボールを強く投げて、天井や壁にばかりぶつかる。<イライラすると？どうするんだっけ？前回、手をたたいたよね。しないと？>と Th が言ってもする様子を見せない。後片付けをしようとしたところ、今までに一度も乗ったことのない幼児用のブランコに乗る。Th がブランコを押さえていると、ぼそっと「弟にほんとは言って欲しくないこと言われた。わかっているけど言って欲しくなかった」<何言われたと？>「『障がい者が手をばんばんたたきよって』って言った。そうだけど、言って欲しくなかった」。

#### Mo. との話：

#19 では、Mo は兄と弟は、周りの人に何でも言えるので心配してないが、C1 はそういうことが言えないので、それを心配していると話された。学校の先生は C1 に障害者手帳は入らないというが、Mo としては心配。#20 では、Th が今年度で異動してしまうので Mo と今後について話し合う。Mo が面接の継続は C1 に決めさせたいと言われた。#21 では、通知表を C1 が持ってきてるとは知らなかったと話された。#22 では、Mo は少し C1 がプレイセラピー中に Th に甘えているのではないかと話した。ただ、C1 がこれだけ自分を出せるのもこじかないと言う。#24 では、C1 が普通クラスに入る話は、Mo は担任の先生から聞いていないと

いうことだった。#25 では、「手を叩いていたけれども、イライラを落ち着かせるためのものと思わなかった」「B2 の判定で手帳をもらった」と話された。#26 では、Th が弟さんに言われたことが C1 にとってきつかったことを話すと、Mo が「私も弟が言った後に、本当、手をパンパン叩いて障がい者やねと軽い気持ちで言った」と話された。<お母さんが言ったということは話しませんでしたね>と Th が伝えると「確かにビデオで聴いていると言ってませんでしたね。この間、見たテレビで、親が子どもにコメなど万引きさせてお金を換えていた。その子どもが捕まったけれども、親が万引きさせたとは、子どもは一言も言わなかった。テレビのことだと思っていたけれど、自分のことだった」と目を真っ赤にされて「深いですね・・・私が思っている以上に本人は深く思ってるんですね・・・」と涙をこぼして泣かれた。

### **第 5 期：衝動性が弱まり友達と遊ぶ時期（#27～#32：X+2 年 10 月～X+3 年 3 月）**

#28 では、トランポリンで飛び跳ねた後、降りて床の上を転がる。「少林寺拳法、習つとる。2、3 週間くらい前からかな・・・弟と一緒に。特別支援学級の子もいる。黄色や緑、黒帯がある。今、白やけど緑になりたい」と嬉しそうに話す。

#29 では、キャッチボールにならず、失敗すると自虐的になり自分の手を叩いたりする。何かあったのかと尋ねても答えない。プレイルームを出ると兄が玄関のところに見えた。

#30 では、「最近、面白いゲームをお年玉で買って、前みたいにイライラしなくなった」「武将っていうテレビゲームで、織田信長とか徳川家康とかいろんな人が出てきて、いろんな戦いをするんだ。その戦国の武将が、負けてもまた勝負ができるんだ。だから、前みたいに負けても怒らなくなった」と楽しそうに話す。<負けても、もう一回やれるといいんだね。そうか、だったら失敗してもやり直せるといいんだね>。

#31 では、学校で大変なことが 3 つあったと話し出す。一つは、障害者手帳のためのテストのやり直しのこと、修学旅行、期末テストの 3 つらしい。<障害者手帳の取りなおしてどういうこと？>と Th が聞くと、実はテストの時に、障害者手帳がほしかったために、わかる問題もわからないといったことがばれたらしい。にこにこ話して困った様子もない。ゆったりとボールを投げながら、再検査だと話す。

#32 では、キャッチボールを始めるが、C1 のボールが少し乱れていて、Th が受け損なう時もあった。「先生、今度何処行くの？」と C1 が尋ねたので、Th は敷地内にある別の相談室に変わることを伝えると、手元が狂ったのか今まで一度も投げたことがないほど高めのボールが天井近くの壁に当たった。「壁に穴が開いた」二人とも茫然と穴を見ていた。

### **Mo. との話：**

#28 では、弟と一緒に少林寺拳法を習わせた。バスケットボール大会で Mo は応援に行き、C1 が全部得点を入れたことを満面の笑みを浮かべて話された。#29 では、<今日はお兄ちゃんが来られてたんですね>と Th が言うと、「このところ二人はずっとケンカしていて・・・」と Mo が話し出すと、そばにいた C1 が「あいつが悪いんだ・・・」と急に強い口調でダーツ

としゃべり始めようとする、Mo がきつい表情になる。#30 では、Mo はあまり普通クラスに行くことは望んでいない様子。今後のセラピーについては、C1 が新しい先生なら続けたいと決めたことを話された。#31 では、C1 が検査でズルをしたことが特別支援学級の先生にばれたことを笑顔で話す。一日中、C1 が缶詰にされて叱られたことや、C1 が39度も熱があるのに学校へ出かけなければならなかったことなど、少し憤慨している様子。C1 がズルをしたことへの怒りは全くない。#32 では、同じ敷地内の相談室に変わるとを伝えると、すぐに電話番号を教えてほしいと言われた。困った時は、こちらの電話番号にかけられるとよいことを伝えると、とても嬉しそうな顔をした。Th が家庭をもっているか尋ねる。初回面接の時も同じようなことを質問されたことを思い出す。

## IV 考察

### 1. 衝動性の背景

本事例の主訴の中に、Mo が「自分の気持ちをため込まないで話してほしい」という語りがある。また、#17 で Fa が、C1 が今まで兄弟の真ん中でしかも兄が障がいを持っていたので、どうしても C1 に目がいきにくい環境だったことを話された。それで、C1 が自分の気持ちを話すということがあまりできなかったこと、もう少し話せるようになるといいということを穏やかに言われている。両親ともに C1 が話せるようになることを望んでいる。

Th が C1 と一緒にキャッチボールなどさまざまな遊びをしていて C1 が衝動的になるときは、何かに失敗した時だった。イライラを解消するためにボールを蹴ったり、壁に投げつけるという行為を行った（#2, #4）。松本（2020）は、ADHD の診断を下すためには、不注意の徴候が必ず現れていなくてはならないこと、診断において、こうした徴候は複数の環境（例えば、家庭と学校など）で現れていなければならないことと社会的能力と学業能力を妨げるものでなくてはならないと述べている。本事例の衝動性は主に家庭で表われ、#4 で C1 が「ここまで自分を出したのは初めて」と Mo が話しているように外で衝動性という自分を出すことがむしろ難しく、そのことから本事例の衝動性という特徴は発達障害による脳機能の障害と結び付けにくい。#4 で Mo が「ゲームで負けたりすると、半端じゃない。お父さんがいると叱られるから絶対やらない」と言い、Th が「いつ頃から、できないとあたるようになりましたか」と尋ねると「小さい赤ちゃんの時から。うまくいかないと、自分で頭の後ろを壁とかにガンガンぶつけるんです」と答え、C1 の衝動性は小さい時から自虐的に行われていたことがわかる。それは Fa が言うように一つ上の兄が障害をもっていたため兄に手がかかり、C1 は自分の気持ちをうまく受け止めてもらえず、その気持ちを衝動性という形で他者ではなく自分に向けてきた可能性がある。筆者とのプレイセラピーでも、衝動的な行動を Th に向けてくることはなく、ボールを遠くに蹴ったり、素手で壁を叩いたり（#4）して発散し、むしろ自分の手を痛めつけ、できない自分を責めているような印象を持たせる。失敗したり、できなかったりしたときに受け止めてもらう体験が少なかったことが推察さ

れ、自信の喪失や自己評価を下げってしまうことに繋がって、それがさらに衝動性に結び付き、悪循環となった可能性がある。

## 2. キャッチボールが果たした役割

本事例でのプレイセラピーでは主にキャッチボールが中心になった。フリスビーや卓球、バスケットボールなど他の遊びもしたが、大きめのボールを使ったり小さなボールをグローブを用いてキャッチしたりして遊ぶことが多かった。しかし、始めはキャッチボールにならなかった。C1が投げるボールはThの正面に来ることが少なく、お互いに受け取り投げるという行為が成立しないような状態が続いた。そのたびにC1はボールを蹴ったり、見境なくボールを投げたり衝動的になった。しかし、Thが必死に相手を見て投げるように声をかけると応じてくれるようになる。高橋(2017)がプレイセラピーの中でクライアントの暴投ともいえる投球を横滑りになりながらも偶然キャッチできたことは、クライアントとセラピストの両者にとって重要なことであると実感したと述べている。筆者は受け取ることはできなかったが、必死でついでにこうとした。さらに2人でキャッチし合えるようにお互いに相手が受け取れるようなボールを投げることに精を出した。ボールを介したこの体験は相手との分離と対自を前提としつつも、同時に「相手に自分を協調させる」というあり方が求められる(高橋, 2017)体験ではなかったかと思う。ボールのやり取りには、高橋(2017)が述べるように両者の一体感をもたらす側面があった。また、大石(1998)がプレイセラピーにおけるキャッチボールについて、そのボールが言語的なコミュニケーションにおける「言葉」の役割を担っていると指摘したように、この第1期を経て第2期ではC1はキャッチボールをしながら話し出すようになり、C1とThの間にはボールと言葉が飛び交うようになる。キャッチボールをしながら話に熱中するC1は、ボールを受け取り損ねても気にならず、衝動的にならなくなる。

人とのやりとりの中で、受け止めてもらい、受け止めやすい位置に返してくれるという安心感をボールから体得し、それが言葉に変わり、言葉がしっかりと受け止められたという体験をしていた可能性がある。するとボールを外しても気にならない。言葉という一番受け止めてほしいものを受け止めてもらっている体験をしているとみなすこともできる。自分が受け止めてほしいものをボールを通して練習し安心してから言葉に移ったと考えられた。

その後、キャッチボールは上達し、友達と遊んだり、嫌な子に何かされてボールを投げ返すこともできるようになる(#8)。言葉で伝えることができなくとも、ボールが自分の意思を伝える道具、代弁者になった。さらに#23では弟や友達のほかにFaとキャッチボールができるようになったことを誇らしげに語る。中村(2008)は多動性・衝動性の高い児童は他者に認められる体験を増やしていくこと、達成感を持つことを援助していくことの重要性を述べた。本事例では、弟やFaとキャッチボールができるようになったC1は、他者に認められる体験とともに自尊心を高め、達成感も得られたものと推察される。

### 3. セラピストと母親の関係がクライアントに与えた影響

C1 は第Ⅱ期に入って困っていることを語り出す（#7）。特別支援学級のある中学校に進んだらよいのかという迷い、クラスの女子の嫌がらせ、下級生のばかにした態度などを語る。しかし、#7 における母親面接で「来る前から、今日は僕の心の叫びを聞いてもらおうかなと言っていたんです」と Mo が話していることから、Mo は C1 が自分の問題を Th に相談してみようと思ったことを知っていて、背中を押している可能性を感じさせる。すでに#6 の母親面接で、就学支援の心理検査で特学と判定が出たため、兄と同じ特学のある中学校に進ませたらよいか迷っていると Th は Mo から相談を受けている。C1 よりも先に Mo との関係性ができ始めている。小俣（2006）は、親はセラピーの協力者であるという枠づけが必要であると述べている。同一セラピストの母子並行面接の場合、母親に協力者になってもらえるような関係性を作ることはクライアントとの関係を作る以上に大事になることもある。#1 で、Th は Mo から結婚しているのか、子どもはいるのかという質問を受け、このセラピーでは Mo との関係がカギになるかもしれないと感じた。本事例では、Mo がビデオを通してプレイセラピーの様子を見ることができた。#4 では Mo が「クライアントがここまで自分を出し発散しているのは初めてだ」と言い、#5 では「キャッチボールが上手になっている」と認め、子どもの変化を感じている。C1 が自分を出し、遊びの中で少しずつ何かができるようになる姿を見て、Mo にも変化が起きた可能性がある。#11 では、「ここは何でも話せる場でお話していいんだよとも言ってます」と語っていることから、C1 が Th に話すことを積極的に勧めている。実際に#11 で、C1 が野球部に入りたいのに入れない辛い気持ちを吐露する。また、#13 で C1 が Th に数学ができなくて困っていることを話したので、数学に対する C1 の不安を Th が Mo に話したところ、#14 で、Mo が学校の先生に話し、C1 は数学の先生から個人的に教えてもらうことができわからないところが解消できている。C1 が困っている状況を Th に話し、Th がそれを Mo に伝えることにより、Mo が先生に話して解消されるという連携ができている。Mo と Th の関係性が良くなることにより良い循環も生まれ始め、C1 の学校での生活に援助の手が差し伸べられている。

### 4. 衝動性の意識化

はじめの頃は失敗をするとボールを蹴ったり見境なくボールを投げることをしたが、次第に衝動性がおさまってきた。それは自分を語れるようになってきたり、キャッチボールができるようになったという自信であったり、認められる体験だったと考えられる。しかし、衝動的な気持ちはやはり起こり、ときどき衝動的な行いが現れた。そのたびに Th は C1 と二人で深呼吸をしたり、イラっとした気持ちにどう対処したらよいか一緒に考えたりした（#4）。いい方法が見つからないでいると、#5 ではホワイトボードに雪だるまの絵を描いてサングラスをかけたりして自分の気持ちを描画で少し発散させたが、描画は#5 だけで終わる。深呼吸をして調整することが続く。ただ、深呼吸をすることにより C1 は自分の衝動性を意識化することができ、イラっと来た時にはどうしたら自分の気持ちがおさまるのか

に注意を向けるようになったと考えられる。#25では、イライラすると手を叩くと治ると自分で発見する。成功したときはパチパチと叩き、失敗したらパチッと叩くことを実践する。しかし、これを弟から「障がい者が手をパンパン叩きよって」と言われて（#26）やめる。#30で、お年玉で買った『武将』というテレビゲームで負けても以前のように怒らなくなったと話す。戦国の武将が出てきて戦うが、負けてもまた勝負ができるゲームで、失敗してもやり直すことができればイラっとくることもなく衝動的にならずにすむことに気づく。このように衝動的になる自分を意識化できたことにより、自分を観察し衝動的にならないようにするにはどうしたらよいかという方向に自分の目を向けることができた。篠田・沢崎（2012）がADHD特性を持つ大学生の根本的な問題として、自分の特性を正確に理解できていないために現実の姿と自己理解がズレやすくて確な対応戦略がとれないことをあげている。本事例は衝動性という特性をもつ小6男児であるが、衝動的になるという特性を自分なりに理解するようになった。衝動的になる自分と向き合い、理解し受け止めたからこそ、衝動性への自分なりの対処方法に気づくことができたと考えられる。

## V おわりに

本論文では、衝動性の高い男児がキャッチボールを中心としたプレイセラピーを通して変容していった面接過程を振り返った。キャッチボールから気持ちのやりとりに繋がり、さらにキャッチボールそのものの上達が達成感や自信に繋がり、友人や弟、父親との交流へと広がっていった。その背景として、母親とセラピストの関係がクライアントとセラピストの関係を支えたと考えられる。また、クライアント自身も自分の衝動性を認識し、自分の衝動性がどんな時に弱まるのかに注意を向けて日常を過ごすようになった。本事例はセラピストの異動のために途中終結となった。最後の面接ではクライアントの暴投によって、セラピストがクライアントの心も母親の心も受け止めきれない知らされた。終結の仕方については今後の課題として心して受け止めたい。

**<付記>** 本事例を発表することに承諾して下さいました A くんとお母様に心より深謝いたします。A 君とご家族のご多幸を心よりお祈り申し上げます。

## 文献

- 片桐正敏 2008 土曜教室における支援と学びを通して特別支援教育を考える 子ども発達臨床研究, 2, 39-48
- 松本好生 2020 注意欠陥多動症 ADHD が示す「落ち着きのなさ」の再考—ADHD の病態と症状を踏まえて— 新見公立大学紀要, 41, 15-20
- 文部科学省 2022 通常の学級に在籍する特別な教育的支援を必要とする児童生徒に関する全国実態調査

- 中村真樹・小澤永治・飛永佳代・遠矢浩一・針塚 進 2007 多動性・衝動性の高い発達障害児の対人関係の発達を促す臨床心理学的援助に関する研究—対人関係発達を促すプログラム及び対象児間の意識の変化に関する検討— 発達研究, **21**, 137-144
- 中村真樹・小澤永治・飛永佳代・遠矢浩一・針塚 進 2008 多動性・衝動性の高い発達障害児の対人関係の発達を促す臨床心理学的援助に関する研究—プログラムにおける児童の内的体験と他児への意識に関する検討— 発達研究, **22**, 117-126
- 大井妙子 2007 学習障害の傾向をもつ女兒とのプレイセラピー—二次的障がいへの心理的援助という視点から— 発達臨床心理研究, **13**, 13-23
- 大石英史 1998 緘黙の不登校生徒のプレイセラピー—キャッチボールを行いつつ—山口大学教育実践総合センター研究紀要, **9**, 15-25
- 小俣和義 2012 夜泣きを繰り返す小学生男児と不安の強い母親との心理面接—同一セラピスト親子平行面接の進め方の工夫— 青山心理学研究, **12**, 25-34
- 齊藤万比古・岩垂喜貴 2007 軽度発達障害における二次的障害 小児看護, **30** (9), 1267-1273
- 篠田直子・沢崎達夫 2012 ADHD 特性をもつ大学生の特徴と大学生活への適応 目白大学心理学研究, **8**, 49-62
- 高橋 悟 2017 プレイセラピーにおいてボールがもたらす体験について—ボール遊びにおける分離と一体感, そして自他を超えるもの— 臨床ユング心理学研究, **3** (1), 17-27